



「イエメンルプアハリ砂漠」第67回女流画家協会展出品作

いりえ・かずこ 山口県出身。1938年女子美術大学卒。林武に師事。48年女流画家協会会員。53年女流画家協会賞(55年も)、独立賞。57年独立美術協会会員、92年会員功労賞。96年『色彩自在』三五館刊、他画集4冊。2000年入江一子シルクロード記念館開館。09年NY日本クラブギャラリーにて個展。12年NY凱旋記念展(日本橋三越、名古屋三越)。日米交換展(NYリバーサイド美術館)、安井賞候補展、日米女流合同展、国際女流美術家クラブ展(パリ近代美術館)等出品。セントラル美術館他個展多数。現在独立美術協会会員、女流画家協会委員、入江一子シルクロード記念館館長。



## 97歳の現役女流画家 入江一子 「あと10年は描き続けたい」

東京・阿佐ヶ谷駅から徒歩ほど近い、自宅を改装した「入江一子シルクロード記念館」にて。現在はバリ島の舞踏をモチーフにした200号の大作を制作中だ。

### 所 属する女流画家協会、独立美術協会ともに、現在最年長作家である洋画家・入江一子。「女性画家の団結と発展」を目的に女流画家協会が創設されたのは1947年。発起人は桂ユキ子(ゆき)、賀文字、佐伯米子、桜井悦、桜井浜江、遠山陽子、仲田菊代(好江)、中谷ミユキ、藤川栄子、三岸節子、森田元子の11名(50音順)だ。「所属団体にかかわらず、女性であれば誰でも受け入れる」をモットーに掲げ、同年の7月にアンデパンダン形式の第1回展が開催された。入江は第2回展から参加し、以降毎年欠かさず新作を意欲的に出品し続けている。設立当時の女流画家協会について尋ねた。

「当時の女性達は皆さん、命懸けで絵を描いていましたよ。泣きながら演説する方もいらっしゃいました。三岸節子さんは、『女性性は会員にはしない』と独立美術協会を追われた身ですよね。皆さん女流画家協会に懸けていたし、私もそうでした。第一に女流画家協会があり、自分の生活はその次。今はそういう方も減ってきているようです。私の目

「当時の女性達は皆さん、命懸けで絵を描いていましたよ。泣きながら演説する方もいらっしゃいました。三岸節子さんは、『女性性は会員にはしない』と独立美術協会を追われた身ですよね。皆さん女流画家協会に懸けていたし、私もそうでした。第一に女流画家協会があり、自分の生活はその次。今はそういう方も減ってきているようです。私の目

の黒いうちは、若い作家を育てていきたいと思っています」

入江は1916年に生まれ、多感な少女時代を、韓国・大邱で過ごした。子どもの頃からとにかく絵を描くことが好きだった入江は、小学6年生の時に描いた静物画が昭和の御大典で天皇に奉納されるなど、早くからその才能を発揮する。当時から日課のように1日1枚は必ず絵を描いていたという。「身体が丈夫ということもあったんでしょけれど、とにかくたくさん絵を描きました。90歳になるまで、病気ひとつしたことがなかったですから」と語る。

絵を学ぶため単身日本に戻り、東京専門美術学校(現・女子美術大学)に入学。在学中に恩師である洋画家の故・林武氏と出会う。

「林先生には、先生が亡くなるまでの50年間お世話になりました。描くことに対する大変な努力、死にも狂いの姿勢というのは、先生に教えていただきましたね」と当時を振り返る。

卒業後は戦火を逃れ韓国へと戻ったが、終戦後に再び日本へ。丸善

本店のショーウィンドウを飾るデザインーとして勤務したのち、教職の道へと進む。子ども達のプリミティブな表現に触れることができたのは、入江にとって非常に良い経験だったようだ。教師を続ける傍ら、北海道から九州まで全国の石仏を訪ね歩いては絵に描き留めてきた。30年間教師と画家の二足のわらじを続け、53歳の時に念願だったシルクロードを訪れる。以後40年間、訪れた国の数は実に30ヶ国以上にのぼる。

「韓国の大邱で育ったということも関係しているのですが、大陸のもつバザールの雰囲気、とても好きなんです。原色を使った色とりどりの民族衣装や現地の音楽も好きで、シルクロードを旅した時は、現地の音をテープレコーダーに録音していました。現地地のざわめきや音楽を聴きながら描いていると、その土地の空気が蘇ってくるように思います」

2009年には93歳でニューヨークでの個展を開催。海外での初個展ということで、身体を氣遣った家族からは初め反対されたそうだが、

「死んでもやる」と言い張り、ついに家族が折れた。会場には多数の来場者が訪れ、「Powerful」「Nice color」と好評を博した。あと3年で100歳を迎えるが、今もなお衰えることのないその制作意欲に驚かされる。取材当日も独立展に出品するため制作中の、200号の大作を見せていただいた。幼少の頃と変わらず、絵に向かわない日は1日としてないという。

「101歳でもお元気な日野原重明先生(聖路加国際病院理事長)が私の描いた絵を見て下さって、『100歳が関所』とおっしゃって下さり、励まされました。あと10年は描き続けたいですね。私の師である林武先生は、『女は頑張って描けばそれでいい』とおっしゃっていたけれど、私はやっぱり、いい絵を描かなければ意味がないと思う。でも若いときより、どんどん絵が分かってくるんですよ。使う色もどんどん鮮やかになっていく。気力は今も十分にありますが、とにかく体力がもつと欲しいですね」と語った。

(8月27日、入江一子シルクロード記念館にて)